



世界一

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 臓器病態治療医学分野

岡久 稔也 おかひさとしや



2004年10月より米国テキサス州ヒューストンのイラー医科大学外科学人工臓器開発センター、能勢之彦教授(73歳)の研究室で、講師として血液浄化の研究をしています。私が渡米したのは、日本人に適した人工心臓を開発する10年間のNEDプロジェクトの追い込み時期でした。一頭数百万円かかる仔牛を使った長期生存実験の手術を月に数回行い、医局横の牛用ICUで飼育し、毎朝、全員で世話(トレッドミルなど)をしていました。

能勢先生は、世界で初めて血液透析を行ったDr. Kolffの弟子でもあり、多くの血液浄化フィルタを開発してきました。現在、私の属する血液浄化グループの大きなテーマは、人工心臓と血液浄化の融合治療を行うことです。病原物質を積極的に除去する安全な血液浄化法について様々な点から検討しています。また、これ以外に何でもやっていいよと言われ、血液浄化と人工心臓のモニタリング技術や新しい補液バッグの開発も行っています。

こちらに来て思うのは、世界一と接する機会が本当に多いということです。テキサスメディカルセンターは病院を備えた

世界有数の研究施設群です。また、NASAの宇宙航空研究開発機構(JAXA)との間で行っている侍フォーラムでは、2月からチェアマンを仰せつかり、宇宙開発という最先端の分野との異業種交流を行っています。さらに、自宅から車で10分のところにあるウエストサイドテニスクラブに家族で通い、マッケンローが練習したコートでテニスをし、世界一のプレイヤーの試合を見ることができました。

5月にドイツで開催された第5回世界アフエーシス(血液浄化)学会では、能勢先生がグラントの関係で参加できず、代わりに理事会に参加し、自分の発表以外に能勢先生のワークショップの発表もさせていただきました。また、「この機会にドイツのトップクラスの病院を見てきなさい。」と言われ、世界アフエーシス学会会長のDr. Boschに連絡をとってくれ、会長自らがミュンヘン大学病院の血液浄化部門を案内してくれました。いろいろな意味で本当に勉強になりました。また、「人工臓器の父」と呼ばれる能勢先生のすごさを改めて知った学会でもありました。

しかし、こちらに来て一番感動したのは



能勢研究室の暖かい雰囲気です。空港の送り迎えはもちろんのこと、高速道路でエンストした際は医局長が駆けつけてくれました。また、能勢先生ご夫妻がよく自宅へ招待をしてくれます。Julie、大久保先生、尾田先生をはじめ研究室のメンバーも細やかな心遣いをしてくれます。徳島大学の寺嶋先生や親友の森田先生が訪れた際にも大歓迎をしてくれました。おかげで私の家族もアメリカ生活を堪能し、楽しい思い出と沢山の友達を作ることができました。

能勢先生の座右の銘は「無限」です。無限にもいろいろな段階があって、最終は人とのつながりです。「君がどんな人と一緒に仕事をしたかによって君の価値が決まるぞ。自信を持って、世界一の仕事をしなさい。」といつも言われます。何歳になっても、夢と情熱と強い意志を持ち、私利私欲に走らず、楽しみながら仕事をしている姿からは、いろいろなことを教わります。このようなすばらしい先生のところで研究ができ、本当に感謝しております。今回の留学の合言葉は、「Enjoy! Aggressive Creation」です。独自の花が咲かせるように、自信を持って頑張ります。